

## 遠藤周作論 — 「弱者」の形象 —

長 濱 拓 磨

〈 요약 〉

엔도 슈사쿠(遠藤周作)의 「역사 소설」에 있어서, 「강자」는 「화들주위 순교」를 이룬 사람이며, 「약자」는 배교자를 의미한다. 이 양자는 작품 안에서 대조적으로 그려져 양자의 대립이 작품 구조의 근간을 이루고 있다. 전자의 「강자」를 대표하는 것은 〈페드로 키베〉이며, 이것에 대해서는 이미 논했던 적이 있다. 거기서, 본고에서는 「약자」에 대해 고찰한다.

「약자」를 대표하는 것은, 「침묵」의 기지지로이지만, 배교자라고 하는 기준을 두면, 그 밖에도 이노우에 치쿠고노카미, 로드리고, 웨레이라라고 하는 인물이 해당한다. 이것들과 「침묵」 전후의 작품의 등장인물을 정리하면, 기지지로와 로드리고라고 하는 2가지 「약자」의 계보가 발견되었다. 즉, 기지지로의 계보는, 사회적 지위 낮은 농민으로, 고문의 공포를 위해서 배교자가 된 인물들이다. 한편, 로드리고의 계보는, 사회적 지위 높은 지식인으로, 고문은 아니고 사상적 갈등의 끝 뜻밖에 배교자가 되어 버린 인물들이다. 어느 「약자」로 해도 신앙을 둘러싼 내적 고뇌를 안고 있어, 그것이 작품의 중심이 되는 〈극〉을 움직이고 있다. 이상을 확인했다.

は じ め に

『沈黙』의 키치지로에 대표される 「弱者」は、遠藤文学において様々な形で登場し、時に主人公として描かれたり、時に主人公を凌駕するような圧倒的な存在感を持って描かれていく。中でも遠藤周作の「歴史小説」<sup>1)</sup>においては「華々しい殉教」を遂げた「強者」と対照的に、心の弱さ故に棄教してしまった「弱者」として繰り返し登場する。論者はかつて拙稿<sup>2)</sup>において「強者」の代表として〈ペドロ岐部〉を取り上げ、様々な作品から考察したが、「強者」と対峙する「弱者」の重要性も改めて確認することができた。このように遠藤文学における重要な主題の一つである「弱者と強者」の問題を考えて行く上で最も重要な作品は言うまでもなく『沈黙』(新潮社、1966・3)である。

遠藤は『沈黙』執筆のきっかけとなった踏絵を見た時に感じた疑問について次のように述べている。

この二つの疑問はそれをその後、噛みしめているうちに次第に私には切実なものになりはじめた。なぜならば、それは強者と弱者、—つまりいかなる拷問や死の恐怖をもはねかえして踏絵を決して踏まなかった強い人と、肉体の弱さに負けてそれを踏んでしまった弱虫と

を対比することだったからである。

(「一枚の踏絵から」／『切支丹の里』人文書院, 1971・1)

ここには「強者と弱者」の明確な線引きがある。踏絵を踏まなかった「強者」と踏絵を踏んだ「弱者」である。いずれ「強者」は「華々しい殉教」を遂げていくわけだが、「弱者」の場合は「転び者」, 「棄教者」として心に負い目を感じ苦しみながら後の人生を歩まざるを得ない。だが、そこにこそ「神と悪魔, 人間と社会, 肉欲と霊の血みどろな闘い」<sup>3)</sup> という〈劇〉があり, 作家として遠藤が「弱者」の問題に取り組んだ最大の理由が存在する。

そこで本稿では「弱者」像が確立した『沈黙』を中心として, 『沈黙』前後の作品に散見される「弱者」の系譜を整理し, 遠藤文学における「弱者」の形象の問題を考察していきたい。

## 1. 「弱者」像の形成

先に述べたように『沈黙』において「弱者」像が確立されるわけだが, そこに至る初期作品で既に「弱者」に近い人物が数多く登場している。そのことでまず確認しておきたいことは, 初期作品の主人公が遠藤に近い人物であることだ。遠藤の自作解説では次のように発言している。

…『アデンまで』から『黄色い人』を経て『海と毒薬』という作品を結ぶ一本の線はぼくの作品の大きな縦糸になっている。『アデンまで』の主人公は『黄色い人』の私になり, 『黄色い人』の私は言うまでもなく『海と毒薬』の二人の主人公, 勝呂医師と戸田医師とになっていたわけだ。『アデンまで』はぼくの今まで書いた小説の原型みたいなものなのだろう。

(遠藤周作「わが小説」／「朝日新聞」, 1962・3・30)

ここには3つの重要な証言がある。第一に『アデンまで』—『黄色い人』—『海と毒薬』が遠藤の「作品の大きな縦糸」であること。第二に主人公も「たがいに似すぎている」こと。そして, 第三に, 主人公が作者の分身であることである。これらを踏まえると遠藤文学において既に「弱者」は登場していたということになる。『アデンまで』, 『黄色い人』, 『海と毒薬』のいずれの主人公も受動的な人物で「弱者」と呼ぶことが出来るからだ。いずれの人物も遠藤が自身の姿を投影しつつ造型された人物である。それに加えて, 「第三の新人」との交流, 「切支丹時代」の発見, ヘルツフォーク神父の棄教という3つの要因によってより明確な形での「弱者」が形成されていったと考えられる。順に追って見たい。

第一に「第三の新人」との交流。遠藤は同じ慶応大学出身の安岡章太郎の紹介で後に「第三の新人」と呼ばれた作家たちと知り合いになり, 小説を書くことへの様々な刺激を受けた。中でも大きく影響を受けた一つが「弱者」の問題であったという。次のように語る。

ほくが「第三の新人」から受けた影響というのは二つあると思います。ひとつはなんといつても「第三の新人」の文学——といつても全部が全部ではないですが、彼らのなかに共感を見出したのは、強者の立場から書かないということです。弱者、もしくは劣等者の立場から書くということです。それは私がキリスト教にもっていた考え方——さきほど申し上げました——と一致しておるわけです。これがひとつ。

(傍線部引用者／対談「文学——弱者の論理——遠藤周作氏に聞く」／「国文学解釈と教材の研究」, 1973・2)

この中で「共感」とあるように、元来遠藤文学は「弱者の立場」から書かれており、「第三の新人」たちと交流することによって、「弱者」の問題がより意識化、あるいは明確化されたことがわかる。その上で、遠藤の場合はキリスト教の問題から「弱者」の問題を考えるようになったのである。

第二に「切支丹時代」の発見。遠藤はフランス留学を通して自分と同じようにヨーロッパに留学した日本人に興味を持つようになった。調べて行く中で、ザビエルが派遣した最初の留学生ベルナルド、天正遣欧使節、有馬神学校の卒業生たちの存在を知る。さらに上智大学のチースリック教授の下でキリシタンについて本格的に学ぶ機会を得る。その頃の様子を次のように語っている。

三浦朱門と私とが上智大学のチースリック先生を週に一回たずね、この切支丹の碩学から転び者の一人、一人について教えを乞うたあの日々のことを私は今、なつかしく思います。「どうして、あなたたちは」とチースリック先生はある日、苦笑して言われた。「転び者に興味をもつのですか」

私は笑って黙っていた。しかし唇にその返事はほとんど出かかっていた。「それは……私が小説家だからです。そして私が彼等に近い……からです」

このチースリック先生のおかげの勉強で、私にはしかし、ほんの僅かな知識ではあったが、その頃の代表的な弱者を選び出すことが出来た。ファビアン不干斎、トマス荒木、フェレイラ（沢野忠庵）、ジョゼフ・キャラ（岡本三右衛門）の四人である。

(傍線部引用者／「一枚の踏絵から」／『切支丹の里』人文書院, 1971・1)

遠藤は「転び者」すなわち「弱者」に興味を持つ理由を、自分が「小説家」であり「彼らに近い」からという。ここに遠藤と「弱者」の問題の関係を窺うことができる。しかも、4人の代表的な「弱者」のうち、フェレイラとキャラが『沈黙』の主人公であるし、トマス荒木の名前も『長崎出島オランダ商館員ヨナセンの日記』に登場する。いずれも『沈黙』と関わる重要な人物である。こうして彼らが生きていた時代、すなわち「我々の国が、まともに西洋とぶつかった時代」<sup>4)</sup>である「切支丹時代」を発見するに至ったのである。

第三にヘルツォーグ神父の棄教。1957年、遠藤の母の恩人であり、遠藤夫婦の結婚式の司式も務めたヘルツォーグ神父が突然、失踪し、のちに日本人女性と結婚するという衝撃的な事件が起った。このことは、『黄色い人』と『火山』のデュラン、『沈黙』のフェレイラ、『影法師』の「貴方」のモデルとして繰り返し描かれている。この棄教という問題が「弱者」の意味を問うことにも繋がっていく。遠藤は次のように語る。

遠藤 だからその棄教者という問題は、さきほど言った外人の神父さんからも私の問題になりましたし、それから切支丹時代の棄教者、日本人の棄教者たちの心理、単に教えを棄てたというのではなくて、ほんとうに自分が愛したものを棄てるということですから、その心はどうしても考えざるをえなかったんです。

(遠藤周作・佐藤泰正『人生の同伴者』人生社、1995・11)

ヘルツォーグ神父がなぜ棄教者となってしまったのか本当の理由は誰にもわからないだろうが、遠藤にとって信仰の指導者でもあった師を単純に棄教者や、教会の裏切者として断罪することは難しかったであろうし、できなかったはずである。その苦悩の中で改めて「弱者」の問題を考えたに違いない。

こうして遠藤が初期作品で描いて来た弱者的な主人公象は、これらの3つの出来事により深められ、それらが「切支丹時代」を背景とする「歴史小説」において明確な形で「弱者」が形成されたと言える。しかも、「歴史小説」においては宗教弾圧の過酷な時代にあって、背教か殉教かというより明確なかたちで信仰が問われるのであり、背教した「弱者」と殉教した「強者」という明確な区分が厳然と存在するのである。

## 2. 2つの「弱者」の系譜

繰り返すが遠藤の「歴史小説」では、「強者」は殉教者、「弱者」は棄教者という明確な定義が存在する。この定義を『沈黙』の登場人物にあてはめると、「強者」は雲仙の殉教者たち、キチジローの兄妹、モキチとイチゾウ、長吉、春、ガルベであり、「弱者」はキチジロー、ロドリゴ、フェレイラ、井上筑後守、通辞となる。それぞれの人物の概略を示すと次のようになる。

第一に「強者」にあたるのは、殉教者たちである。フェレイラの手紙で紹介された雲仙の殉教者たちが「まえがき」に登場する。アントニヨ石田をはじめとする殉教者たちは、雲仙の地獄のような拷問にも屈せず殉教を遂げている。

次にキチジローの兄妹である。彼等は密告され、キチジローと共に詮議を受けた。キチジローだけが棄教し追放されたが、棄教しなかった兄妹は火刑で殉教した。それに衝撃を受けたキチジローは日本を離れマカオで暮らしていた。8年前の話として語られる。

モキチとイチゾウは、ロドリゴとガルベが潜入したトモギ村の住民だった。役人の詮議により

村の代表としてキチジローと共に3人が役所に出向いた。3人はいったん踏絵を踏むが、さらに役人から踏絵に唾をかけ聖母の悪口を言うように強制された時、キチジローだけが言われたとおりに棄教し、モキチとイチゾウはできなかった。そのため、2人は水磔に処せられて殉教を遂げた。

生月島の長吉は、片眼の男で、生月島の久保浦の出身である。イルマンの石田から洗礼を受け、洗礼名はジュアンである。ロドリゴと同じ牢屋にいたが、役人の刀で処刑された。

春は、長吉と同じ生月島の久保浦の出身で、イルマンの石田から洗礼を受けた。洗礼名はモニカである。ロドリゴと同じ牢屋にいて、ロドリゴに白瓜をくれた。一度踏絵に足をかけたが、ガルベを棄教させるため、役人によって薦に包まれたまま海に突き落とされて絶命する。

ガルベはポルトガル人司祭である。リスボン生れで、ロドリゴやマルタと同じカムボリードの修道院でフェレイラから神学を学んだ。フェレイラ棄教の報告を受け、真相を突き止めることと日本潜伏のため、ロドリゴと共に日本に潜入した。潜入後、ロドリゴと共に宣教にあたっていたが、役人の追求が激化するに伴い、ロドリゴと別れ単独行動を取ったが捕まってしまう。海に突き落とされた信徒たちを助けようとして海に入り絶命した。

こうして見ると、モキチやイチゾウ、春など一度は踏絵を踏んでおり、必ずしも「華々しい殉教を遂げた」とは言えないが、見せしめのためとは言え殺されたので結果的には殉教者と言えるだろう。彼らのような貧しい農民たちの殉教は「華々しい殉教」に憧れていたロドリゴの幻想を打ち砕き、あらためて神、教会、信仰の意味をロドリゴに問い直させる重要な役割を果たしている。

第二に「弱者」。キチジローが代表的な棄教者である。8年前、キチジローとその兄妹はその一家に恨みをもった密告者のため密告されて切支丹として取り調べをうけた。キチジローは役人が一寸、脅しただけで棄教したが、キチジローの兄妹は最後まで棄教を拒絶し火刑にかかり殉教を遂げている。いたたまれなくなったキチジローは日本を離れマカオで暮らしていた。8年後、キチジローはロドリゴやガルベと共に日本へ戻った。トモギ村で平穏な生活を過ごしていたが、役人の詮議が激しくなりモキチやイチゾウと共に村の代表として役所に出向かされた。役所で踏絵を踏み、さらに役人の強制どおりに唾を吐き聖母の悪口を言い追放された。追放後も、ロドリゴを役人に売ったり、何度もコンヒサンをしては棄教を繰り返した。だが、最後には江戸切支丹屋敷で中間としてロドリゴに仕えている。

通辞は、キチジローの密告により捕まったロドリゴが日本に来て最初に討論した人物である。地侍の息子であり、出世するためにセミナリオで学び、通辞となった。洗礼は受けたが、もともと修道士になる志も切支丹になる心も持ち合わせていなかったという。カブラル師の日本人蔑視に強い不満を抱いていた。

井上筑後守は、30年前、蒲生家の家臣だったとき、切支丹となった。今でも切支丹は邪教とは思っていないが、日本には必要ないものとして弾圧に当たっている。元切支丹であっただけに信仰者の弱点をよく知っており様々な方法を駆使して多くの信徒や司祭を棄教させた。

フェレイラはポルトガル人司祭である。リスボンの神学校で教えていたことがあり、20年間イエズス会の地区長として、日本宣教に活躍した。逮捕後、3日間穴吊りの拷問にも耐えたが、同じ穴吊りにあっている5人の百姓たちを助けるために棄教した。棄教後は、沢野忠庵という日本人名を名乗らされ、「天文、医術の書を翻案し、病人を助け」、西勝寺ではキリスト教批判の書、「顕偽録」を書いている。ロドリゴの説得に当たり日本沼地論を展開する。

ロドリゴは、鉱山で有名なタスコ町で生れ、17歳で修道院に入った。マルタとガルベと共にカムボリードの修道院でフェレイラから神学を学んだ。フェレイラ棄教の報告を受け、真相を突き止めるためにガルベと共に日本に潜入した。トモギ村、五島と宣教の働きは拡大したが役人の追求が激化した。モキチとイチゾウが水磔で殉教する姿を見届けた後、ガルベと別れ単独行動を取るが、キチジローの裏切りにより捕まった。同じ牢屋にいた長吉が刀で処刑されたり、春が海に突き落とされ死ぬ様子やそれを助けようとして海に沈んだガルベの姿を目の当たりにする。穴吊りの拷問にあっている信徒の苦しみやフェレイラの話聞き、踏絵を踏み棄教する。棄教後は長崎でフェレイラと共に切支丹探索の任に当たっていた。江戸に送られたのちは、岡田三右衛門の名と妻を与えられ、30年間切支丹屋敷に幽閉され病死した。

ここに登場した「弱者」はよく見ると二種類に分けられる。キチジローを代表とする貧しい信徒とロドリゴを代表とする智識人である。さらに智識人は通辞、井上筑後守といった日本人とフェレイラ、ロドリゴの外国人司祭に分けられる。キチジローのような貧しい信徒の中には拷問の末に殉教する「強者」もいれば、キチジローのように拷問が怖くて棄教する「弱者」もいる。信徒側の問題は拷問に耐えられるかどうかにあると言ってよい。対する智識人は、日本人側には幕府の政策の変化や「西洋のキリスト教」に対する不満が根底にあり、拷問とは無関係である。そして西洋人側は、拷問を受けた上に、数多くの殉教者に対して神が沈黙しているという信仰的な煩悶と、「西洋のキリスト教」に対する不満もあった。このように棄教した「弱者」もそれぞれ異なる理由により棄教しており、単純に切支丹弾圧のせいだけとは言えない。そこで、「弱者」をキチジローを代表とする貧しい信徒の系譜とロドリゴを代表とする智識人の系譜に分け、次章から詳しく考察していきたい。

### 3. キチジローの系譜

キチジローの系譜に連なる「弱者」を順に「歴史小説」の中から見に行きたい。最初に確認できるのは『最後の殉教者』（『別冊文芸春秋』、1959・2）に登場する喜助である。『最後の殉教者』はいわゆる浦上四番崩れを背景とした作品で、舞台は浦上中野郷である。喜助は「図体だけは象のように大きい体が似あわぬ臆病者で何をさせても不器用」であった。部落の総代の国太郎爺からは、「喜助はいつかこの臆病ゆえに、ゼズス様を裏切るユダのごとなるかもしれない」と心配されていた。迫害が始まると案の定、真っ先に棄教し、「ころんだ」という証拠の爪印を押して、皆の前から姿を消した。国太郎爺の心配どおりになってしまったのである。その後、

中野郷の信徒たちは津和野へ送られ、そこでも激しい拷問を受けていた。そこへ喜助がやってきて仲間と同じ牢屋に入った。作品はその翌日、喜助の拷問が始まる場面で終わっている。

さて、この作品には様々な問題が孕んでいる。まず「強者」と「弱者」の定義である。棄教した喜助は、自分の弱さを嘆き、「人間には生れつき心の強いもの、勇気あるものと、臆病で不器用なものとの二種類がある」と考える。前者が「強者」で後者が「弱者」である。次に生れた時代の違いである。「信仰の自由が許されている昔に喜助が生きていたなら彼だって立派とはいえぬまでも、ゼスス様やサンタ・マリア様を決して裏切る羽目には陥らなかったであろう」とある。これは遠藤が「サド伝」で、サドが「生まれた時代が違えば立派なクリスチャンであっただろう」と考えたことと同じである。そして、喜助の信仰が蘇ったきっかけを与えたのがある声だったことである。失意の中にあった喜助に対して次のように呼びかけている。

「みなと行くだけでよか。もう一ぺん責苦におうて恐ろしかなら逃げ戻ってもいい、わたしを裏切ってもよかよ。だが、みなのおとを追って行くだけは行きんさい」

（『最後の殉教者』）

この声を聞いた喜助は、再び中野郷の信徒が拷問にあっている津和野にまでやって来て同じ牢屋に入ったのである。『沈黙』では主人公のロドリゴに対して踏絵のキリストが語りかけていたが、ここではキチジローの原型とも言える喜助に呼びかける声が聞えたのである。キチジローとロドリゴが同じ「弱者」という範疇で括られる証左と言えよう。

次に登場するのは『その前日』（『新潮』、1963・1）の藤五郎である。この作品もまた『最後の殉教者』と同じ浦上四番崩れが背景となっている。

『その前日』は、作者と等身大の〈私〉が手術を受ける前日の話と、浦上四番崩れの時の藤五郎の話が同時進行する。手術に怯える臆病者で聖書に触れてから30年になる〈私〉と、拷問に耐えられず踏絵を踏んだ「弱虫」で30歳の藤五郎と、キリストを裏切ったイスカリオテのユダの3人が同質の人間として描かれている。ここに登場する藤五郎がキチジローの系譜に連なる人物である。

藤五郎は「体の大きな男のくせに臆病者」で、みんなから軽蔑されており、「三十になっても嫁のきてがな」く、「母親と二人だけで暮らしてい」た。浦上四番崩れの時、藩の警吏が高島村を襲撃し、浦上に引っ張られた10人の男の中の1人である。村人の心配通り藤五郎は代官所の吟味で弓をふりあげられる前に踏絵を踏み釈放された。

藤五郎を除く9人は信仰を守り抜き、津山に送られる。9人が送られる船着き場には藤五郎の姿が見られた。津山で拷問を受けていた9人のうち、一番の年寄りだった久米吉が死んだ。それでもなお拷問に耐えている時、藤五郎が牢屋に入れられた。藤五郎は不思議な声を聞いたからだという。

そうれ…、拷問が恐ろしいなら戻れと言うと、藤五郎は奇妙なことを言いだした。自分がここに来たのは声を聞いたからである。自分はたしかにその声を耳にした。その声は藤五郎にもう一度だけ、皆のいる場所に行くことを奨める。皆のいる津山に行って、もし責苦が恐ろしければ「逃げもどってよい」から、あと一度だけ、津山まで行ってくれ、と泣くように哀願したと言うのである。  
(傍線部引用者／「その前日」)

そのようにして皆の元へ戻った藤五郎ではあったが翌日、拷問を受けた藤五郎は再び棄教して、役人によって追放され、行方知らずとなった。一方で、拷問に耐えた8人は、明治4年、新政府の手で釈放された。

ここで重要なのは藤五郎が喜助と同様に皆が拷問を受けている場所へ戻ってくれという声を聞くことと、戻った藤五郎が再び棄教した点である。何度も棄教する藤五郎の行為は一見無駄なように見えるが、臆病者の藤五郎が拷問を受ける覚悟をして皆の元へ戻ったことは1人が死んで失意の中にあつた8人に勇気を与えたに違いない。もしかすると、ここで藤五郎が戻って来なかったら8人は拷問に耐えられなかったかもしれない。藤五郎の行為には意味があつたのである。

そしてキチジローという名前が初めて登場するのが『雲仙』（「世界」、1965・1）である。この作品でも作者と等身大の「能勢」という作家が、1631年12月5日、雲仙の地獄谷で7人の信徒が殉教を遂げた場所を訪れ、その場所にいたはずのキチジローの痕跡を辿る取材旅行である。「能勢」は、「子供の時、家族ぐるみで洗礼をうけさせられ」「四十歳の今日まで、まだ棄教もせずに生きてきた」人物である。彼が雲仙まで来た最初の目的は、コリヤドの『切支丹告白集』の中でただ一人の「弱者」である「男」の痕跡を辿るためであつた。「強者」の告白にあふれている『切支丹告白集』のなかにあつて唯一の「弱者」であるこの「男」は、武士で「能勢と同じような薄弱な意志やまづしい節操を持って」おり、「三百年も前、司祭の前に駱駝のように跪き幾分、自暴自棄と自分の汚なさを曝けだす快感にかられて、切支丹であることを隠した罪を告白している。だが、地獄谷に来ると、この「男」ではなくキチジローの姿が「能勢」の前にあらわれる。

キチジローもまた「女房子供の命を逃れうずるために」役人衆の前で転宗を誓つた「弱者」であつた。だが、転んだ後も長崎から小浜まで歩き、さらに雲仙を登って7人の信徒が拷問を受けた場所まで来た。この時のキチジローの気持ちを「能勢」は次のように推測する。

「ゆるしてください。わしはお前さまのように殉教ばできる強か者でござりませぬ。こげんな怖ろしか責苦を思うただけで胸がつぶれるような気がいたしまする」  
／（転び者には、あなたのわからぬ、転び者としての苦しさがござりまする）

（『雲仙』）

雲仙で拷問に耐えた7人の信徒はさらに島原の刑場へ送られる。キチジローはそれにもついて



いった。死刑を前にした牢舎にキチジローはあられわれ食事を差し入れする。だが、棄教者であるキチジローからの差し入れは拒否される。次の日、7人の信徒は火刑にあい殉教する。役人が火をつけた瞬間、キチジローは受刑者に近づくが、役人から切支丹かと尋ねられると、「自分は切支丹ではない、この人たちとは何の関係もない。ただこの光景に気が顛倒したのだ」と呟いて立ち去った。キチジローは最後まで「強者」にはなれなかったのである。

ここでキチジローは、『最後の殉教者』の喜助や『その前日』の藤五郎のように声に促されて信徒たちのもとに戻ってきたわけではないが、『沈黙』のキチジローとはほぼ同様に、「弱者」の苦しみを味わいつつ、何度も棄教を繰り返している。「能勢」はそんなキチジローを想像しながら、完全にキチジローと一体化してキチジローの心の弱さに寄り添っている。しかも、これらの記録を書いたのがクリストヴァン・フェレイラ<sup>5)</sup>であるところに、『沈黙』との共通性がある。そのようにして、『沈黙』へと繋がっていくのである。

また、『沈黙』以後にも姉妹作『黄金の国』（『文藝』、1966・5）と『メナム河の日本人』（新潮社、1973・9）の2作に繰り返し登場する嘉助がいる。『黄金の国』では、キチジローがロドリゴを裏切ったように嘉助はフェレイラを裏切り役人に居場所を知らせようとし、踏絵を踏む。嘉助は最初に登場した場面から「弱者」の苦しみを訴えており、ユダの問題に強い関心を持っていた。踏絵を踏んだ時も次のように訴えていた。

嘉助 かんになしてくれんですか。かんになしてくれんですか。皆の衆。こん世の中には弱  
か者と強か者とがおるとさ。強か者はこげんきつかこともこらえてハライソに行かると  
ばってん、弱か者はこげんして踏絵ば踏んでしまう。 （『黄金の国』）

嘉助は棄教後もフェレイラの元を訪れ、雪や源之介、久市、茂吉の4人が水磔にかかることを報告して去る。

『メナム河の日本人』での嘉助は、『黄金の国』と同一人物である。フェレイラの居場所を密告し棄教した罪の重荷に耐えきれず日本を離れアユタヤに流れ着いている。アユタヤでは殉教を覚悟して日本宣教に向う〈ペトロ岐部〉と出会い慰めを受ける。

嘉助 いやいや。転び者は地獄の火に投げ入れらるる。そうにきまっとります。こげん俺ん  
ような男は。

ペトロ岐部 いいか、嘉助殿。神さまはな、お前さまのように己がつかまらずきに泣く者のため  
におられるのだ。もし日本の転び者たちが、皆、お前さまのように我と我が身をそのよう  
に責め苛んでいるならば…私は尚更、日本に戻りたい。戻って、神さまは罰したり裁いた  
りなさるために在すのではない。神さまは転び者の痛みも心底知っておられると告げに  
いかねばならぬ。 （『メナム河の日本人』）

ここに登場する〈ペドロ岐部〉は、「強者」であるばかりでなく人間の哀しみを知っている。そのことをエルサレムやローマを巡る10年の旅を通して知ったという。だが結局、嘉助は心の重荷を苦にして生き続ける。

このようにキチジローの系譜に繋がる「弱者」たちは、作者と等身大の主人公に共感を寄せられつつ、信仰の問題に苦悩して踏絵を踏んでいったのである。

#### 4. ロドリゴの系譜

前述の通り、ロドリゴの系譜とは智識人であり、日本人と西洋人の両方がいる。遠藤文学で1番最初に登場する知識人の「弱者」は、『留学』の荒木トマスである。荒木トマスは有馬神学校を卒業し、しばらく修道士をしていた。1587年、秀吉により突然禁教令が出され日本人司祭の養成が急務となりマカオの神学校に派遣された。さらに初めてヨーロッパに送られた留学生としてローマへ渡り、コレジオ・ロマノで学んだ間違いなく当時としては一流の「智識人」である。そして司祭の資格を得た後、1614年、伴天連追放令で激しい迫害が始まった日本へ帰国した。5年間潜伏したがついに捕まり棄教した「弱者」である。「汝のラテン語は善し。されど汝の信仰は悪し。汝の留学は無駄であった」というオザラザ師の評価<sup>6)</sup>が最も象徴的である。この荒木トマスと対照的な生き方をしたのが〈ペドロ岐部〉である。拙稿<sup>7)</sup>で論じたように、遠藤文学で初めて〈ペドロ岐部〉の名前が登場したのが『留学』であった。荒木トマスと〈ペドロ岐部〉は同じ有馬神学校を卒業し、同じようにローマへ渡り神父の資格を取り、同じように日本へ帰国し潜伏司祭として活躍した。だが、逮捕後、荒木トマスは棄教し、〈ペドロ岐部〉は殉教をした。同じような道を歩みながら最後は全く別な人生を歩んだ対照的な二人の生き方は、「強者と弱者」の問題を考えるための絶好の題材だったと言えよう。しかも荒木トマスもまた、遠藤が自分に近い人物として共感を持って描かれている。このことは、『留学』が単行本として刊行される際に削除された第二章の末尾部分に明確に現われている。『沈黙』とも関連する箇所なので引用したい。

信徒だけではなく、宣教師や司祭のような人たちの中にも、取調べの最中に棄教した者がいた。外人宣教師のキャラやフェレイラや日本人の荒木トマスのような人物がそうである。キャラやフェレイラは、転んだあとは岡本三右衛門とか沢野忠庵という日本名をつけさせられ役人たちの手先にされている。日本人の女を妻にもち子供まで生んだその人たちのことを教会側の研究では僅かしかふれていないが、その僅かな解説にも伝道史の汚点であり裏切者だという烈しい非難の言葉が使われていた。

(中略)

夕靄は街道を包みはじめていた。大村湾の鳥々も、もう背後の空の暗さと区別がつかなくなっている。この夕靄の街道を荒木トマスや沢野忠庵や岡本三右衛門などは、幾度通りすぎ

たことであろう。彼等は迫害の時代に生れたため、裏切者と言われ伝道史上の汚点と非難され、自分は今の時代に生れたからせいぜい布教雑誌で叩かれるだけですみ、こうして妻や子供までつれて九州に遊びに来ている。しかしこの夕靄の街道を荒木トマスや沢山の転び信徒が工藤と肩を並べて歩いている。 (傍線部引用者／「留学」／「群像」, 1965・3)

ここに出てくる「外人宣教師のキャラやフェレイラ」は言うまでもなく『沈黙』の主人公ロドリゴのモデルとなったイタリア人司祭ジュゼッペ・キャラとポルトガル人司祭フェレイラのことである。2人は背教した後、それぞれ「岡本三右衛門」, 「沢野忠庵」と名乗らされ日本の役人の手先となった「転び者」であり、荒木トマスも「転び者」として似たような境遇をたどっている。また、ここで彼等達「転び信徒」と一緒に歩いている工藤は、「第一章 ルーアンの夏」の主人公で、フランス留学の経験があるカトリック信徒の作家であり、作者自身が色濃く投影された人物である。「転び者」への遠藤の深い共感を読むことが出来る。

こうして『沈黙』では、フェレイラとキャラが主人公となっていったわけだが、姉妹作の『黄金の国』では、井上筑後守とフェレイラが「弱者」として登場する。『沈黙』に登場した井上筑後守は元切支丹であったことを自分でも告白しているが、なぜ切支丹を棄てたのかは語られていなかった。それに対して『黄金の国』の井上筑後守は棄教の理由を語っている。

井上 余が棄てたわけか。それはな…この日本の土にあの教えの苗は育たぬと思うに至ったからだ。(中略)

井上 …いいか。朝長。余は時折、この日本が嫌になることがある。嫌というより怖ろしくなることがある。切支丹で申す悪魔よりも、もっともとうす気味のわるい泥沼だ、この日本は。他国のどんな苗でもこの沼に植えれば、枯れるか、似ても似つかぬ花を咲かすのだ。(『黄金の国』)

井上がここで語る「日本泥沼説」は『沈黙』ではフェレイラがロドリゴに語ったものであるが、『黄金の国』では井上筑後守が切支丹であり後に殉教する朝長作右衛門に語っている。この意味は大きい。いわば、井上筑後守とフェレイラの深い関連性を窺うことができるからだ。さらにフェレイラを尋問した時の井上の次のセリフも重要である。

井上 そこもとの神が勝つか。余が勝つか。平田。(『黄金の国』)

このセリフは明らかに芥川龍之介『神神の微笑』(「新小説」, 1922・1)の「泥烏須が勝つか、大日靈貴が勝つか」を意識したものと言える。先ほどの「日本泥沼説」も『神神の微笑』でオルガンティノ師を脅かす日本の「造り変える力」とよく似ている。こうした『沈黙』と『神神の微笑』の関連についてはいくらか議論もあるが、ここを見る限り影響関係は明らかであろう。

さらに、『黄金の国』のフェレイラは、『沈黙』のロドリゴのように信徒が迫害を受けているのに沈黙している神に疑念を抱いている。様々な拷問にも耐えたが、最後には信徒たちを助けるため踏絵を踏む。ロドリゴのように踏絵から声は聞えないし、ロドリゴとは異なり、踏絵を踏んだことを後悔しているような様子も見られるが、日本で25年間宣教の働きをして、様々な迫害や殉教を見て来た結論として説得力がある。

そして、『メナム河の日本人』にもモレホンという元神父が登場する。史実のモレホン神父は27年間日本宣教で活躍し、日本追放以後も日本再潜入の方法を画策していた日本宣教の中心人物であった。だが、『メナム河の日本人』のモレホンはアユタヤに教会を建てたが、女性問題のため教会から離れたという過去を持つ。この点ではヘルツォーク神父を思わせる。そしてアユタヤの町ではいつも酔っ払い、神からも人からも忘れられたいという願いを持ってひっそり暮らしている。この点ではグラム・グリーン『権力と栄光』のウイスキー神父を思わせる。

作品中でのモレホンの役割は、アユタヤに住んでいた日本人たちや、心の重荷を負っている嘉助、殉教した〈ペドロ岐部〉、王室の権力闘争に夢破れた山田長政らの人生を見守ることにある。

モレホン 人はそれぞれにわが身を賭けたもののために死んでいく。ペドロ岐部もオーヤ・セーナ・ピモック・長政殿も。その二人の臭いが、この日本人町の跡のどこかにまだくすぶっているようだ。その人間の臭いのなかには神がいる。神もその跡を私たちと同じように、つらそうに見ておられる気がする。  
(『メナム河の日本人』)

このようにロドリゴの系譜につながる「弱者」たちは、智識人として高度な智識を要しながら、あるいは智識ゆえに「日本と西洋」「日本人とキリスト教」の問題にぶつかり、キリスト教から離れて行ったと言えるだろう。

## 5. 荒木トマスの問題

最後に荒木トマスの問題について言及しておきたい。前述のように荒木トマスは、『留学』に初めて登場し、「強者」の〈ペドロ岐部〉と対照的な「弱者」として、他の作品にもいくつか登場する。拙稿<sup>6)</sup>で論じたように、〈ペドロ岐部〉は『沈黙』に大きな影響を与えている。その『沈黙』の「オランダ商館員ヨナセンの日記」の中に一箇所だけ荒木トマスの名前が出て来る。次の箇所である。

一六四五年（正保二年十一月・十二月）

十二月五日（略）余は日本に来た時から背教パードレたちの事を知ろうと努めたが、荒木トマスという日本人は長くローマに滞在し、法王の侍従を勤めたこともあり、前に数回キリシタンであることを自訴したが、奉行は、彼が老年のために精神錯乱したのであると考

えて放置し、その後一昼夜穴で吊された後、教えをすてたが、心中には信仰を失わず死亡した。今は二人のみ生存しているが、一人は忠庵というポルトガル人で元当地の耶蘇会の長であったが、その心は腹黒い。他の一人はポルトガル、タスコ生れの司祭ロドリゴで、これも奉行所で踏絵を踏んだ。二人とも現在、長崎に住んでいる。

(傍線部引用者／『沈黙』)

原典である村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』(岩波書店、1956～1958)では「トーマ」となっているが『沈黙』ではわかりやすく「荒木トマス」と変更されている。これ以外で、荒木トマスに関する内容に変更はない。ただ、沢野忠庵(フェレイラ)と共に長崎に住んでいる「背教パードレ」が「ロドリゴ」となっており、原典にある「前の乙名後藤庄三郎殿(町年寄後藤庄左衛門貞朝か)の兄弟」とは全く異なる。これは明らかに創作である。

また、『沈黙』に関連する形で遠藤はいくつかのエッセイを書いていて、その中にも荒木トマスの名前が見受けられる。その1つが三浦朱門と共著の『キリシタン時代の知識人——背教と殉教——』(日本経済新聞社、1967・5)である。この中に「トマス荒木——最初のヨーロッパ留學生の苦悩」という章があり、荒木トマスについて説明しているが、実は『留学』「第二章 留學生」とほぼ同じである。「荒木トマス」が「トマス荒木」となるなど多少の語彙の違いはあるが内容はほとんど変わらない。もう一つは『沈黙』の取材記録や舞台裏を語ったエッセイ「一枚の踏絵から」(『切支丹の里』人文書院、1971・1、所収)であり、これも『留学』「第二章 留學生」と内容が重なる。

そして、荒木トマスと同じようにヨーロッパへ渡り日本に帰国したのちに背教した天正少年使節の一人千々石ミゲルと同列に比較する形でエッセイ「主観的日本人論 II」(『朝日新聞』、1972・8・28)や小説『銃と十字架』(中央公論社、1979・4)に登場する。特に『銃と十字架』では荒木トマスと〈ペドロ岐部〉の生き方の違いについて明確に示されている。次の箇所である。

ペドロ岐部が千々石ミゲルや荒木トマスの轍を踏まなかったのは、この基督者の歴史的行為と基督教との明確な区別を認識したためだと思われる。不幸にして千々石ミゲルや荒木トマスは十六、七世紀の西欧基督教会の行動を基督教の教えそのものと混同した。この世紀の教会の過失を、基督教自体の性格と錯誤したのである。彼等は基督教会もまた歴史的に数多くの過ちを犯しながら、より高きものに成長していくのだという「教会の成長」という考えを持ちえなかったのだ。千々石ミゲルや荒木トマスは、この時代の教会の過失を基督教そのものと同一視して、信仰を放棄した。だがペドロ岐部は彼等二人よりも、よくイエスを知っていた。

(傍線部引用者／遠藤周作『銃と十字架』)

『留学』の時点では「転び者」の荒木トマスと「殉教者」の〈ペドロ岐部〉という認識しかなかったが、ここではなぜ2人が異なる生き方をしたのかその分岐点をヨーロッパ体験に置いてい

る。「転び者」となった千々石ミゲルや荒木トマスと、「殉教者」となった〈ペドロ岐部〉の生き方の違いは、ヨーロッパの植民地支配の現状に対して、教会の過失と基督教そのものを区別できるか否かにあったという。このことは、遠藤自身が「基督者の歴史的行為と基督教との明確な区別」ができるようになったことを示しているのではないだろうか。この頃、遠藤の切支丹研究は10年以上におよび、東京、東北、長崎の日本各地にある殉教地を何度も訪れて小説の糧としてきた。子供の頃から読み続けていた聖書研究も、最新の神学を学んだ上でエルサレムも訪れ、『イエスの生涯』『キリストの誕生』『死海のほとり』を著した。その上で、〈ペドロ岐部〉のような「強者」の心情と、荒木トマス、千々石ミゲルのような「弱者」の心情のいずれにも通じるようになったのであろう。以上のように「弱者」の問題は『沈黙』以降の遠藤文学にも影響を与え続けたのである。

## 註

- 1) 遠藤文学における「歴史小説」については、以下の拙稿において整理をこころみた。ご参考いただければ幸いである。  
拙稿「遠藤周作の「歴史小説」の一側面 — 松田毅一との関連をめぐって —」（『遠藤周作研究』第4号，2011・9）
- 2) 例えば、次のようなものがある。
  1. 「遠藤文学における〈ペドロ岐部〉（一） — 『留学』『沈黙』を中心として —」（『遠藤周作研究』第8号，2015・9）
  2. 「遠藤文学における〈ペドロ岐部〉（二） — 『メナム河の日本人』から『王国への道』まで —」（『京都外国語大学研究論叢』第85号，2015・7）
  3. 「「人間」を語る「歴史小説」 — 山本周五郎『赤ひげ診療譚』と遠藤周作『王の挽歌』 —」（『キリスト教文藝』第31号，2015・7）
- 3) 遠藤周作「白人の小説について」（『毎日新聞』，1955・7・28）
- 4) 遠藤周作「切支丹時代の智識人」（『展望』，1966・1）
- 5) 『沈黙』の「まえがき」にはフェレイラが篤実な信仰者として雲仙殉教の様子を伝える手紙が引用されている。このフェレイラの手紙は実在のフェレイラが書いたものであり、レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』（岩波文庫，1960～1962）などで見ることができる。『沈黙』においてはH・チースリク『キリシタン人物の研究 邦人司祭の巻』（吉川弘文館，1963・12）の「アントニヨ石田」の中から抜粋し引用されている。
- 6) 遠藤周作「トマス荒木 — 最初のヨーロッパ留学生の苦悩」（『キリシタン時代の知識人 — 背教と殉教』日本経済新聞社，1967・5）
- 7) 拙稿「遠藤文学における〈ペドロ岐部〉（一） — 『留学』『沈黙』を中心として —」（『遠藤周作研究』第8号，2015・9）

## 参考文献

- レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』（岩波文庫，1960～1962）  
 H・チースリク『キリシタン人物の研究 邦人司祭の巻』（吉川弘文館，1963・12）  
 遠藤周作・三浦朱門『キリシタン時代の知識人 — 背教と殉教』日本経済新聞社，1967・5）

- 『遠藤周作『沈黙』草稿翻刻』（長崎文献社，2004・3）  
山本秀煌『江戸切支丹屋敷の史蹟』（イデア書院，1924・6）  
山本健吉『きりしたん事始』（芸術社，1956）  
長与善郎『切支丹屋敷 ある後日物語』（講談社，1956・11）  
武田友寿『遠藤周作の世界』（中央出版社，1969・10）  
武田友寿『「沈黙」以後 遠藤周作の世界』（女子パウロ会，1985・6）  
笠井秋生『遠藤周作論』（双文社出版，1987・11）  
上総英郎『遠藤周作論』（春秋社，1987・11）  
川島秀一『遠藤周作 愛の同伴者』（和泉書院，1993・6）  
『「遠藤周作」と Shusaku Endo』（春秋社，1994・11）  
山形和美編『遠藤周作 — その文学世界』（国研出版，1997・12）  
川島秀一『遠藤周作〈和解〉の物語』（和泉書院，2000・9）  
笠井秋生・玉置邦雄編『作品論 遠藤周作』（双文社出版，2001・1）  
山根道公『遠藤周作 その人生と「沈黙」の真実』（朝文社，2005・3）  
上総英郎『遠藤周作へのワールド・トリップ』（パピルスあい，2005・4）  
兼子盾夫『遠藤周作の世界 シンボルとメタファー』（教文館，2007・8）  
濱崎史朗『遠藤周作私論』（青山社，2007・9）  
柘植光彦編『遠藤周作 挑発する作家』（至文堂，2008・10）

